

流行と創造性

総務理事 甘利 俊一



学問や技術が高度に発展したために、学者や技術者は自分の狭くて深い専門しかわからない専門バカになってしまう。この結果、社会的総合的な存在である学問や技術が、それを担う専門家の手を離れて一人歩きを始めるという矛盾が生ずる。これはもう今は昔の学園紛争のころに指摘された問題点であった。

あれから20年、学問と技術はこのシナリオとは全く異なった展開を示した。互いに離れたかに見えた物理学と数学の垣根がとれて、両者の交流が数学の新しい発展をうながしている。それだけでなく、すべての分野に共通する非線形問題の中から、カオスやフラクタルといった普遍的な構造が確立しようとしている。一方では、理学と工学の壁は全くなり、全体が一つの学問体系を構成している。技術の世界を見ればそれはそもそもが総合的なものである。ここでは目的とする機能を実現するために、ありとあらゆる手段方法を用い、総合的な優れた機能を実現する。

技術は基礎的な学問と結びついて高度の発展を遂げた。我が学会もこの中で日本の工学界最大の学会に成長した。学問の総合的な発展にあたって、このような大学会組織は有利であり、有効に機能する。しかし一方では、官僚化硬直化をさけるためには、よほどの努力工夫をしなければならない。この隙間をぬって、小さな学会が多く誕生してくる。

奇妙なこともかもしれないが、技術や学問の世界にも流行がある。AIやニューロ、ロボットや超伝導など、多くの流行が作られ、より自由な同志的な結合を求めて専門化した小学会が作られてきた。流行は今まで隠れていた分野や方法の可能性に光を当て、ここに努力を集中するわけで、決して悪いわけではない。この活動を支える小学会にも多くの長所があることを認める必要がある。

しかし、学問や技術が専門分化したものとして孤立して成立するものでないことはこれまでに見てきたとおりである。むしろ、広い総合的な視野に立った洞察から、新しい流行となる分野や手法を開拓していく努力、ここにこそ真の創造性がある。我々のような大学会は、小学会と協力してこれを包み込みながら、常に新しい創造的な分野を生みだしていくことが期待されていると思う。

我々は大学会の長所を生かし、改革を続けることによってこのような創造性を生み育て、流行を創り出すような大学会であり続けたいものである。